

展勝地風土記

Vol.5

平成25年7月26日

展勝地開園100周年記念事業準備委員会
問い合わせ／北上市都市整備部都市計画課 ☎72-8279

展勝地開園100周年記念事業準備委員会、100周年に向けた取り組みとして、より多くの市民に展勝地を知っていただくため、展勝地に関するさまざまな情報を紹介しています。歴史的なこと、地理的なこと、自然環境のこと、そして、展勝地に深く関わった人々や展勝地を題材にした美術・文芸作品などについて紹介していきます。次回は10月25日に発行します。

展勝の継承

北上川が北上山地に最も寄り添うところ、展勝地

北上川と和賀川との合流点付近の陣ヶ丘は、ゴツゴツした岩がせり出している。この岩は地質学的に言うところ「稲瀬火山岩層」と呼ばれ、約2千5百万年前の火山活動で生まれたという。この岩層は、陣ヶ丘をはじめ、男山、国見山、黒岩の雷神山、白山寺山、口内町の阿古耶谷などに見られ、さらに北上川の西側、二子町の飛勢森や飯豊の飯豊森につながっている。国見山の南西ほど近い所に「樺山」の丘があり、縄文中期の配石遺構で、今から5千年前のものだという。配石遺構があるということは、縄文人が直観能力で発見した聖なる場所であるものたちの住みかとしていいところ、信仰の場所であるということだ。まだ山や石が信仰の対象であった時代から、この

土地に住みついていた人は、自然にこれらの岩山に神聖なものを感じたのだろう。

9世紀ごろに国見山一山に多くの堂塔伽藍が立ち並んだことを考えると、国見山も聖なるエネルギーが噴出していた場所と感じたのだろう。以前、国見山や陣ヶ丘の巖頭に立った中国の女性気功医師が地軸から発し、みなぎる強烈な「気」を感じたと話していた。また、男山から見下ろす北上川と和賀川の合流点を「世界的に有名なライン河とモーゼル河が合流する風景に匹敵する」と絶賛した旅人もいた。私たちが展勝地の父と仰ぐ故沢藤幸治は、その造園にあたって次のように書いている。

「この展勝地は、地方有志の一致協力によって経営されつつあるもので、まれにみる山水景勝の地を利用し、特に理想的桜の名所をつくるのを目的として（中略）。また、お

ガイア展勝の会 軽石 昇

平成2年から株展勝地・展勝地レストハウスの代表取締役社長として沢幸さんたちの「展勝の精神」を継ぐことを第一に地域に貢献する企業経営を目指し実践している。展勝地連絡協議会会長、展勝地100周年記念事業準備委員会副会長。

いいお遊覧者も多くなるにつれて、相当な設備が必要になってくる。この点については第一に国家的な桜の名所と云うこと。第二に雄大な天然公園と云うことを常に念頭に置いて、万々に注意をして、それに適当した設備をする事が肝要である。すべては、三好博士、井下技師の指導を尊重して、違算のないように…。

今後展勝地帯に含まれている附近の一木一草といえども、ことに歴史的記念になるような所は、一切手をつけぬよう、お互いに注意してもらいたい。それはたとえ私有地であっても、その処分は、所有者の勝手なものであっても、なるべくこれを保存することに相談しあうよう、したいものである。

特に風景を害するような建物や自然と調和せぬような設備をしては、あとで全く取り返しのかかぬことになる。もし、そんなことになるとう

とりその地方として損失ばかりでなく、国家的の損失にもなるのであるから、この辺のことは、やかましくせず、急がず慎重にその目的を達成するよう、お互いに心にかけて行かねばならぬ。」

『立花展勝地(大正12年和賀新聞)』

展勝の精神

沢幸さんたち(和賀展勝会)は前記のように、縄文の人たち、国見山仏教文化が栄えた時代の人たちと同じく、この地が感じる場所だということを感じていたのである。日本列島最古の地層をもつ北上山地に連なるこの河東地域の丘陵地帯を持つパノラマ、「天地創造」の宇宙的ドラマを想起していたのかもしれない。

多くの人は展勝地といえば、北上川沿いの桜並木とレストハウス周辺

※1 沢藤 幸治…展勝地育ての親・沢幸さんと呼ばれる。大正9年和賀展勝会を結成。展勝地を翌年に開園させた。15年郷土雑誌「共存共栄」を創刊。9年から黒沢尻町長を2期、13年から終戦まで県議会議員を務める。昭和43年に市民の手でみちのく民俗村入口に銅像が建てられた。昭和35年没。

※2 三好 學…東京大学名誉教授で和賀展勝地計画を指導。桜の権威で桜花の研究に造詣が深かった。昭和14年没。

※3 井下 清…東京市公園課長で、和賀展勝地計画を考案。造園学の権威で戦後、全国の都市公園・街路樹などの指導を行った。昭和48年没。

を連想する。しかし、大正9年に発表された「和賀展勝地計画案」は珊瑚橋からの「桜大路」に続いて、畳山（陣ヶ丘）、男山、国見山一帯に「表千本」「裏千本」「奥千本」のサクラを配するという広く深い全体像を描いている。

このサクラの植樹計画には途方もなくスケールの大きな構想があった。それは、単にサクラを植えて見せるのが目的ではなく、この周辺のすばらしい自然風景を全国に紹介したい、そのためには日本人の心情にピッタリのサクラが必要だった。サクラの鑑賞には一本の木を愛でるもの、山とか林の中に点々と咲くサクラを眺めるもの、もう一つはスケールが大きく上から眺めるもの、この3つの方法がある。展勝地は山の上から眺めるという構想だ。そういう理由から陣ヶ丘、男山、国見山などの「高み」の視点が大切になる。

「桜の名所は日本国中到处都是。展勝地の誇りは桜よりも、天から与えられたアノ豪壮雄大なる展望である。これに配する花……中略」：桜の名所にかくの如き魅力をもつところは他にあるだろうか。」

（「共存共栄」昭和11年4月号）
沢幸さんは陣ヶ丘に立つたびに、この誇りを深めていったのである。

展勝地のすばらしさは、その立つ位置によってその景観に変化を与えることにある。陣ヶ丘の南、男山はそれ自体の風貌も展勝地に威厳を加え

ているが、頂上からの眺めもすばらしい。展勝地の絶景の極は、なんといつても国見山頂上からの眺望である。沢幸さんは、よく山に登り、多くの来訪者を国見山、男山、陣ヶ丘に案内したと息子の沢礼さんは書いている。

展勝地公園の歴史は展勝地という名をもらい、「展勝の精神」を発見して、大正の「和賀展勝地計画案」発表から始まる。以来、90余年を経て、平成33年5月には開園百周年を迎える。展勝地は「日本さくら名所百選」に選定され、「みちのく三大桜名所」として知られるなど、約500本の老齢木が独特の趣を醸し出しながら桜並木を形成し、他に類を見ないサクラの名勝地として、この地に訪れる多くの人々を魅了している。

平成10年に「展勝地水辺プラザ基本計画」が策定され、第二桜並木の整備を中心として「展勝地公園整備計画」が立案された。しかし、その後、第二桜並木の必要性について、市議会で質疑応答があり、それを受けての懇談会設立、そこで慎重な意見交換が重ねられた。また、北上さくら会の会が先進地の「弘前」に学んだ経験も大きい。100年を超える老木が200本以上元気で、日本最古のソメイヨシノが120年以上の風雪に耐えて毎年見事に花を咲かせている事実は、老齢化した桜並木の延命や更新が現実的に可能であることを示している。情勢が変化し始めた

のである。

こうした事態を受け、市では新たな視点による整備計画を行い、今まさに「私たちが作る未来 展勝地」というテーマのもと展勝地公園（24ヘクタール）の整備が進められているのだ。

百年の歴史を次の時代へ

しかし、この桜並木周辺の整備がすすめばすすむほど心配になる事がある。かつて児童公園が出来て以来、私たち市民の花見環境が大きく変わり、さらに展勝地レストハウス周辺の整備が進んだ結果、人々の足が陣ヶ丘、男山、国見山へ向かなくなってしまうという事実である。

「和賀展勝地計画案とサクラの植樹は北上川と和賀川、奥羽の連山、そこに開けた平野、南北への眺望まで含め景観を生かすためと、古代仏教の聖地・国見山の山頂まで人々をいざない、その間を逍遙させるための、また交通の便が発達し、天然、自然を求めて来る人々に資するため、この景観にサクラのかんざしを添えようとの一大計画



陣ヶ丘の厳頭からの合流点

だった。」と故熊谷明彦は書き残している。

新しい公園が立ち現われようとしている。その時に私たちは、今一度展勝地の原点に立ち返り、その「思い」「構想」への出発点にすべきことを忘れてはならないと思う。そして今後の「展勝地」のあり方を考え、学び、先人から引継いだこの宝を未来に引き渡す、よい方策を見出したいものだ。壮大な歴史の一コマに生きる私たちの使命でもあろう。

※4 沢藤 礼次郎…沢藤幸治氏長男で元衆議院議員。ペンネーム「沢令二」で小説など執筆し、作品集「私は残る」ほかがある。平成16年没。

※5 熊谷 明彦…北上さくら会の会初代事務局長、元北上市公園委員長。著書「岩手の薬草百科」ほかがある。平成14年没。